

短 報

理学療法士養成校における
学生の不安感についての学年間比較石 倉 英 樹^{1†}

抄 録

本研究の目的は、理学療法士養成校の学生における不安感を、学年間で比較し、学年ごとの特色と不安感を生じさせている要因を調べることで、その実態を明らかにすることである。対象は、4年制大学の理学療法学科に在籍する1年生から4年生とし、アンケート調査により大学生生活不安尺度 (College Life Anxiety Scale; CLAS) を評価した。その結果、学生が大学生活において感じる不安は、1年生で単位取得や試験などの評価に関する不安が高く、学年が上がるにつれて大学の学部・学科に対する不適応に関する不安が高くなることがわかった。このことから、1年生に対しては、学生自身の学習方法に関する指導が重要であることが示唆された。

Key words: 理学療法教育, 学習, 不安

1 はじめに

我が国では、高齢化がいっそう進み、医療・介護・福祉の分野で専門資格を持つ人材の養成が、国として喫緊の課題となっていると考えられる。特に理学療法士の育成については、厚生労働省の医療従事者の需要に関する検討会¹⁾にて、有資格者の供給数自体は増加しているがその養成の質が低下していると指摘されている。これに伴い日本理学療法士協会は、理学療法教育モデル・コア・カリキュラムの改定²⁾を行い、専門的知識の習得や臨床実習の経験など、卒業・国家資格取得に向けたカリキュラムが課せられている。しかし、理学療法を学ぶ大学における教育現場では、こうした現状を十分理解で

きておらず、学生自身が進路に明確な目標なしに漫然と入学した学生に遭遇する。また一方では、入学前に明確な目標を持っていたとしても、入学後に理学療法に対する自らの適性に疑問を感じ、大学生活に不安を訴える学生にも遭遇する。

一般的な大学生では、学年が上がるにつれて、大学生活に対する不安は低下していくことが報告されている³⁾。しかし、理学療法士養成校の学生は、医療技術を習得するための固有の課題を乗り越えなくてはならないため、一般的な大学生とは異なる不安感を抱えている可能性がある。理学療法士養成校の学生に対する大学生活の不安感に関する調査において、佐野ら⁴⁾は、理学療法士養成校の学生に向けて、1～3年生を対象に、大学生活に対する不安感を調査したところ、学年間に差異は認められなかったことを報告している。一方で、金子ら⁵⁾は、理学療法士養成校の1年生を対象に、大学生活に対する不安感の経時的変化について調査したところ、入学か

受稿：2022年5月18日 受理：2022年8月25日

[†] 広島都市学園大学 健康科学部 リハビリテーション学科 理学療法専攻
広島県広島市安佐南区大塚東3丁目2-1

ら10か月程度の期間が経過すると、不安感の中でも「学生自身が理学療法の学部に対して不適応感」を抱き、大学の中退や転学を考える学生が出てくることを指摘している。このように、理学療法士養成校の学生における不安感については、一定の見解が得られていない。学生の不安感について、どのような不安を、どの学年で引き起こすのか把握することは、理学療法士養成校における教育現場における重要な資料となると考えられる。

そこで本研究は、理学療法士養成校の学生における不安感を、学年間で比較し、学年ごとの特色と不安感を生じさせている要因を調べることで、その実態を明らかにすることを目的として調査を実施した。

2 対象

対象は、4年制大学の理学療法学科に在籍する1年生から4年生の全267名を対象として行った。対象の内訳は、4年生68名（男性：45名／女性：23名）、3年生72名（男性：46名／女性26名）、2年生67名（男性：50名／女性：17名）、1年生61名（男性：39名／女性22名）である。なお、休学者は調査対象から除外した。調査は匿名のアンケート調査にて実施し、対象者に研究の意義と回答の有無によって対象者へ不利益が生じないことを説明し、アンケート用紙の提出をもって同意したと判断することを十分に説明した上で実施した。なお、調査を行った時期については、各学年の状況を反映できるよう、進級・入学直後から少し時間をおき、生活に慣れた時期となるように5月に調査を行った。

分析対象は、回収された票のうち、未記入がある票を除外し、240名分とした。回収された票の内訳は、対象の内訳は、4年生62名（男性:39名／女性:

23名), 3年生69名(男性:44名/女性25名), 2年生62名(男性:48名/女性14名), 1年生47名(男性:30名/女性17名)である。回答率は89.9%であった。

3 方法

調査は、学年ごとにアンケート調査により大学生活不安尺度 (College Life Anxiety Scale; CLAS) を評価した。CLAS は、「日常生活不安」(14 項目)、「評価不安」(11 項目)、「大学不適応」(5 項目) の合計 30 項目の設問から構成される。各項目については、「日常生活不安：学生の日常生活に対する不安の尺度」、「評価不安：大学における単位取得や試験で学生が受ける評価に関する不安感の尺度」、「大学不適応：学生に就学上の問題を生じさせるような、大学に在籍し続けることに対する不安感」となる。各設問への「はい」「いいえ」の 2 件法で回答を得て、不安傾向に該当する方向への回答を 1 点とし、この合計点が高いほど不安を抱えていることを示す。

4 統計処理

統計処理には統計ソフト（IBM SPSS Statistics for windows, Version 28.0）を使用した。分析対象は、CALSの「日常生活不安」「評価不安」「大学不適応」の得点について、学年の違いを検討した。学年間の違いについては、Kruskal-Wallis検定で有意差を認めた場合に、Bonferroni法による多重比較を行った。また、統計学的有意水準は危険率5%未満とした。

5 結果

学年間の CLAS 得点を表 1 に示す。「日常生活不

Table. 1 学年間の日常生活不安点数

	1 年生	2 年生	3 年生	4 年生	
CLAS 得点					
日常生活不安	4.91 ± 2.69	4.38 ± 2.67	4.83 ± 2.64	4.32 ± 3.22	
評価不安	5.06 ± 2.89	3.64 ± 2.56	3.81 ± 2.79	3.58 ± 3.07	*
大学不適應	0.15 ± 0.55	1.05 ± 1.37	1.01 ± 1.30	1.77 ± 1.63	†, ‡

* · † · ‡ · § : p<0.05

* : 1 年生 vs 2 年生, 4 年生

† : 1 年生 vs 2 年生, 3 年生, 4 年生

主：4年生 vs 2年生, 3年生

平均值 ± 標準偏差

安」の項目では、学年間に差を認めなかった。「評価不安」の項目では、1年生とその他の学年の間に有意な差を認め、1年生が他の学年に比べて、大学での単位取得や試験に関する評価に対して不安を抱いていることがわかった。「大学不適應」の項目では、1年生とその他の学年の間、2、3年生と4年生の間に有意な差を認め、学年が上がるごとに就学上の不安を抱いていることがわかった。

6 考察

1年生で単位取得や試験などの評価に関する不安が高くなっている要因として、金子ら⁶⁾は、大学入学区分と入学後の学生の不安について調査したところ、AO入試や推薦入試などで入学した学生は、一般試験やセンター入試などで入学した学生に比べて「評価不安」が高くなることを報告している。これについて、AO入試や推薦入試では、一般試験やセンター試験に比べて、筆記試験による学力評価が課されていないことが要因として指摘されている。本研究では、1年生で「評価不安」が高くなっていたが、2年生以降では「評価不安」が低下していた。これは、本研究の調査を行った5月時点で、AO入試や推薦入試などで入学した1年生の学生が、自身で学習した内容が成績に反映されるかどうかかわからずに不安を感じていたが、2年生以降で期末試験などを経験することで、2年生以降において自身が学習した内容を成績に反映される経験を積むことで、不安の解消につながったと考えられる。今回の結果から、1年生の早期から、学生に学生自身での学習とその結果をフィードバックする機会が重要であると考えられる。

学年が上がるにつれて大学の学部・学科に対する不適應に関する不安が高くなることについて、徳田⁷⁾は、「大学不適應」について学科による差を指摘しており、他の大学に比べて4年生の福祉系学科の学生で「大学不適應」に関する不安が高くなることを報告している。また、菅沼ら⁸⁾は、理学療法学科の学生において、臨床実習が学生の不安感に影響を及ぼすことを指摘している。本研究の対象者は、2年生の夏以降に臨床実習が計画されており、今回の「大学不適應」の項目で得点が高くなった要因の

ひとつとして考えられる。そのため、臨床実習に臨む学生においては、学生の精神的フォローがより重要になると考えられる。

7 結語

今回の本研究結果より、学生が大学生活において感じる不安は、1年生で単位取得や試験などの評価に関する不安が高かった。このことから、1年生に対しては、学生自身の学習方法に関する指導が重要であることが示唆された。また、学年が上がるにつれて大学の学部・学科に対する不適應に関する不安が高くなることがわかった。学年が上がるにつれて、臨床実習前の精神的フォローなどが重要であることが示唆された。

8 利益相反 (COI)

本論文に関連し、開示すべき COI 関係となる企業などはない。

引用文献

- 1) 厚生労働省：医療従事者の需給に関する検討会 理学療法士・作業療法士分科会（第3回）。https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi2/0000132674_00001.html (2022.8.10 閲覧)
- 2) 日本理学療法士協会：理学療法教育モデル・コア・カリキュラム。https://www.japanpt.or.jp/assets/pdf/activity/books/modelcorecurriculum_2019.pdf (2022.8.10 閲覧)
- 3) 藤井義久：大学生活不安尺度の作成および信頼性・妥当性の検討。心理学研究 68, 1998: 441-448
- 4) 佐野徳雄・他：理学療法学科における大学生活不安感の経時的変化と学年間比較。帝京科学大学紀要 13, 2017: 31-36
- 5) 金子千香・他：理学療法学科1年生における大学生活不安の経時的変化とその対策。理学療法科学 30, 2015: 689-692
- 6) 金子千香・他：理学療法学科新入生における大学生活不安と入学様式との関連。理学療法科学 30, 2015: 539-543
- 7) 徳田完二：学生期ライフサイクルからみた学生の不安 4年制大学生と短期大学生の違いについて。人間福祉研究 8, 2005: 179-188
- 8) 菅沼一男・他：理学療法学科学生の大学生活における不安－大学生活不安尺度による検討－。理学療法科学 30, 2015: 193-196

Comparison of Student Anxiety in Physical Therapist Training Schools Across Grades

Hideki ISHIKURA^{1†}

Abstract

The purpose of this study was to clarify the actual state of anxiety among students at a physical therapist training school by comparing anxiety among students about grades and examining the characteristics of each grade and the factors that cause anxiety. The subjects were first-year to fourth-year students enrolled in the physical therapy department of a four-year university, and the College Life Anxiety Scale (CLAS) was assessed through a questionnaire survey. The results of this study showed that students' anxiety about their college life was higher among first-year students in terms of evaluations such as credit acquisition and examinations, and was higher as their grades increased in terms of maladjustment to the university department and faculty. This suggests that it is important to provide first-year students with guidance on their learning methods. In addition, it was suggested that psychological follow-up before the clinical practice was also important for first-year students.

Key words: Physical Therapy Education, Learning, Anxiety

¹ Faculty of Health Sciences, Department of Rehabilitation, Hiroshima Cosmopolitan University:
3-2-1 Otsukahigashi, Asaminami-ku, Hiroshima 731-3166, Japan